

# CLILの要素を取り入れた外国語科授業による

## 児童の学習意欲と語彙学習への効果

— 体育科との関連を通して —

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教科教育分野 金丸由梨

### 1. 研究背景

小学校では、外国語が教科として導入され、5・6年生は年間70単位の外国語科授業が実施されている。一方で、学んだ英語を実際に日常生活使用する場面は少なく、外国語を勉強する意味を捉えきれていない児童の存在があるのではないかと考えた。櫻井(2017)の大学生を対象とした小学生時代の外国語活動について振り返るアンケートの調査結果によると、教室の場面等、文脈を伴ったインタラクションへの関わりが児童の学ぶ意欲につながっていると述べている。具体的には、授業の中で教員と児童、児童同士でのやりとりの成功または課題克服が英語を勉強する動機づけとなっていること、教員の話によって英語そのものやその背景にある文化に対する好奇心が英語学習の中で引き起こされたことを示している。

また、外国語科について文部科学省(2018)では英語の意欲づけに関し、「他の教科等で児童が学習したことを活用することや生涯にわたる様々な場面での活用の必要性」が示されており、宇土(2018)は、「カリキュラムマネジメントの視点を活かし、他教科との連携などを通じた多様な学びが求められている」と述べている。

これらのことから、児童が学習したことを活用する場面づくりや多様な学びを促すための他教科との関わりが求められていることがわかる。そこで小学校外国語科における場面づくりや他教科との関わりを設定する手段として、本研究ではCLILという学習活動を用いることを考えた。

### 2. CLILについて

#### (1) CLILとは

内容言語統合型学習とも言われ、言語と教科科目などの内容を統合した学習を意味する。つまり、英語学習に他教科を関わらせることができる活動である。柏木ら(2020)は、CLILは高い言語運用力と自信、より強い動機づけ、様々な方法による言葉の使用、複雑な情報に対応する力を育てる教育のアプローチだと述べている。その背景には、4つのC(以下4Cとする)が兼ね備えられている。4Cとは、①内容(Content)、②言語(Communication)、③思考(Cognition)、④協同学習(Community)である。それぞれが意味することは、①内容として特定のテーマを持って活動がおこなわれること、②言語は対人コミュニケーションのツールとしての使用に高い比重がおかれていること、③思考では、知識の理解や暗記を中心とした表面的な学習の低次思考力から、学んだ既存の知識や経験を結びつけたり批判的に考察をおこなったりする学習の高次思考力に移行させることを目指していること、④協同学習としてグループ学習を用い、協力して活動することや様々な立ち位置の人同士が交流すること、である。これらの要素全てに等しく焦点を当てていることがCLILの特徴であり、より学習効果の高いものになると言える。

#### (2) 小学校におけるCLIL

山野(2013)によると外国語活動にCLILを取り入れることにより、担任教諭の知識と経験を生かした児童の興味・知的好奇心に合う内容の充実、多様な文脈の中で児童に外国語に慣れ親しませることと外国語を使った積極的なコ

コミュニケーション活動、言語学習における低次および高次思考活動の実現、協同学習の質の向上、文化・国際理解の体験的理解の促進ができる可能性等があると示している。

一方で、CLILを小学校で取り入れる課題点についても指摘されており、沖原（2016）は、英語の語彙選定において、入門期では出現頻度を基準にして教える語彙項目を選定していくが、場合によっては出現頻度が低い語でも、他教科で、あるいは教科共通で使われる語彙に加えることも考えられると述べている。また、山野（2013）は、児童・実践者がともに指摘した点として、CLIL授業における英語の多様さと難しさ、CLILの4Cを取り入れた指導案作成における教員の負担を挙げている。

これらのことから、小学校でCLILを取り入れる場合において、児童のレベルを考慮して授業をつくる必要がある。加えて、4Cを取り入れた授業作成に負担があるということから、既成のものをベースとして授業を実施するなどの工夫をする必要があると考える。

### (3) 体育をテーマとしたCLIL

CLILで扱う教科に関して、濱本ら（2019）は、授業実施者と観察者からみる体育のCLIL実践の成果と課題、日本における体育によるCLIL実践可能性を検討した結果、一定の成果が出たことから、学習者にあった適切なレベルで計画・実施されれば、体育はCLILと相性が良い教科であると示している。一方で、多くの教師が体育によるCLILをおこなえるようになるためには、体育のCLIL事例の蓄積が必要不可欠であるとも述べている。

また、外国語科における身体を動かす場面での教授法として、TPR（Total Physical Response）というものがある。TPRとは、リスニングを中心におこないながら、実際に身体を動かして言葉の意味の定着を図っていく方法である。黒川（2020）は、児童は言葉を伴って動作をおこなうことが好きで、TPRを用いた活動に集中して取り組むことができる様子が観察されたと述べていることから、小学生にも効果的な教授法であると推測できる。体育で

は身体を動かしながら学習する場面が生まれることから、CLILで扱う教科として体育を設定することは、児童の学習意欲や語彙学習に効果をもたらす可能性があると考えられる。

したがって本研究では、テーマとして身体を動かしながら英語に触れることができる体育の教科内容を扱うこととする。

### (4) 外国語科の目標とCLIL

CLILは、外国語科で扱う他教科のテーマを設定した活動である。文部科学省（2018）による、小学校学習指導要領外国語科の目標である「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することを目指す」においても、CLILを扱う授業で達成を目指せるとともに、他教科との関わり、児童の学習意欲や語彙学習などにも影響を与えることができるのではないかと考える。

以上のことから、本研究では、体育をテーマとしたCLILを授業に取り入れることの成果と課題について明らかにすること、CLILを取り入れることで児童にどのような影響を与えるのかについて学習意欲と語彙学習に着目して検証していくこと、の2点を研究目的とする。

## 3. 研究方法

### (1) 対象者

山梨県公立小学校

6年生（男子18名、女子9名）

### (2) 実践期間と調査期間

2021年10月28日～11月17日

（うちCLIL実践授業は全3時間）

### (3) 調査内容

#### ① CLILの要素を取り入れた授業実践

##### 参考資料

『小・中学校で取り組むはじめてのCLIL授業づくり』（柏木ら、2020）

Lesson4 Basketball: Pass & Run (pp.88-99)

上記の柏木ら（2020）による授業例を参考とし、CLILの要素を取り入れた授業を全3時間

で作成し、3日間にわたっておこなった(表1)。この單元では、バスケットボールの内容を扱う。本来であればCLILで扱う題材のバスケットボールは既習であることが望ましいが、実習の都合上、その配慮はおこなっていない。なお、体育における安全上の配慮は十分におこなった。

表1 全3時間の授業内容

時数 (場所)	◎めあて ・授業内容
1 (教室)	◎スポーツのスリーヒントクイズをつくろう！ ・身体部位の英単語を確認 ・基本動作の英単語を確認 ・スポーツの復習(6年Unit2で学習済) ・スポーツのスリーヒントクイズをつくる
2 (体育館)	◎バスケットボールに隠れている英語を見つけよう！ ・基本動作の英単語と動作の確認(音楽を使用) ・バスケットボールのパス練習(パスの名称は英語で確認) ・パスとパスカットの練習(ゲーム形式)
3 (体育館)	◎英語を使って仲間を褒めたり応援したりしよう！ ・ストレッチ(準備運動) ・基本動作の英単語と動作の確認(音楽を使用) ・パスとパスカットの練習(パスの名称は英語で確認) ・シュート練習(声掛けの確認も含む) ・ミニゲーム(ドリブルなし)

② 語彙学習に関するテスト(事前・事後語彙テスト)

CLILの要素を取り入れた授業実施前後に、授業で扱う単語を用いた語彙テストを計2回おこなった(表2,3)。語彙テストは実施前後で同一のものを用い、個室で一人ずつ実施した。語彙学習においては、なんとなく理解できてい

るレベルと意味を理解して発話できるレベルが考えられるが、理解レベルの語彙と発話レベルの語彙におけるテストを同じ語彙で実施すると、練習の効果による影響が予想される。したがって、単語の難易度や特徴を考慮しながら理解語彙と発話語彙に異なる単語を設定した。

表2 語彙テスト内容一覧(理解語彙)

理解 ("stretch" → ストレッチの動作をする)		
1	stretch	ストレッチ
2	touch the ball	(ボールに) 触る
3	clap your hands	手をたたく
4	pass the ball	ボールを渡す
5	catch the ball	ボールをキャッチ
6	steal the ball	ボールをとる (奪う)
7	lay-up	レイアップ (シュート)
8	space	空いている場所

表3 語彙テスト内容一覧(発話語彙)

発話 (〇〇って英語でなんて言う?)		
1	立ち上がる	stand up
2	座る	sit down
3	跳ぶ (跳び上がる)	jump
4	歩く	walk
5	走る	run
6	向きを変える	turn
7	すごいね やったね	Good job!
8	惜しいね	Close!

語彙テストでは、本研究におけるCLILの要素を取り入れた授業での使用語彙から出題した。語彙の選定については、6年生までに学習する語彙を参考とした。理解レベルを把握する語彙(表2)は、新出単語を含みつつ児童が知識として持っていないと思われるもの、発話レベルを把握する語彙(表3)は、既習単語を含みつつ児童が知識として持っている可能性があるものを設定した。なお、理解語彙(表2)

の2, 発話語彙(表3)の1~6については, 6年生の教科書に記載されているものである。

テストでは, 理解語彙(表2), 発話語彙(表3)ともに色がついている右側部分を児童が回答する。わからない場合は, 口頭で, もしくは事前に用意したわかりませんカードを提示するよう指示した。なお, 正答を1, 誤答を0と数値化し, 事前語彙テストと事後語彙テストの数値差を, t検定を用いて分析した。

### ③ 学習意欲に関するアンケート(事前・事後アンケート)

児童は, 4件法と自由記述により作成したアンケートをCLILの授業実施前後の計2回おこなった(図1,2)。事前・事後で比較をおこなうために同じ質問を設定しているが, 事前では習い事の有無, 事後ではCLILの要素を取り入れた授業での気づきや感想など, 自由記述による質問も設定した。なお, それらは本研究での比較対象とはしない。また, 学習意欲には様々な観点が考えられるが, 本研究では楽しい, 好き, 難しいという3つを学習意欲の観点とした。

分析は, 最高評価を4, 最低評価を1と数値化し, 事前, 事後アンケートの数値差を, t検定を用いて検証した。自由記述欄においては, テキストマイニングを用いて分析した。

図1 事前アンケート

図2 事後アンケート

④ CLILの要素を取り入れた授業の成果, 課題  
CLILの要素を取り入れた授業について小学校校での実施, 体育をテーマとした実施の2点から検証し, 成果と課題をまとめる。

## 4. CLILの要素を取り入れた授業について

本研究では“CLILの要素を取り入れた授業”(以下CLILの授業とする)を実施するにあたり, 以下の点を考慮した。

小学校外国語科は本格的に取り組まれるようになってから日が浅く, 小学校でのCLILを扱った実践は少ない。それに加えて, 2(2)で述べたように児童のレベルを考慮して授業をつくる必要があること, また, 4Cを取り入れた授業作成に負担があるという課題がある。さらに, 本研究では小学校外国語科指導の経験の有無に関わらず授業を実践したいという点から, 柏木ら(2020)の作成した授業例を参考とし, 児童の実態に合わせた活動に変更しながら授業を準備した。また, 4Cの要素をすべて取り入れた授業は, 小学校段階においては難易度が上がり, 実施が難しくなることから, 4Cのうちの一つである「思考(Cognition)」の要素を削った。

## 5. 結果及び考察

### (1) 児童の学習意欲

児童の学習意欲については, 事前・事後アンケートにおける質問「外国語の授業は楽しい」に注目し, 事前・事後を比較することに加えて, 事後アンケートの自由記述「3時間の授業で, 英語に関する新しい発見や気がついたことはありましたか」「授業をやってみた感想や楽しかったことなど, 自由に書いてください」の2点から分析した。

まず, 「外国語の授業は楽しい」において, t検定における前後比較では, 有意差は見られなかった(図3)が, わずかながら平均点は上がり, 外国語の授業がつまらないと答えた児童が4%から0%となった。また, 「どんなときに楽しい(またはつまらない)と思いますか」という自由記述においてテキストマイニングを用

いた前後比較をおこなった(図4,5). 事前・事後ともに共通している言葉として、「楽しい」、「ゲーム」、「友達」、「ジェスチャー」などが挙げられる。これらにより、外国語の授業で「友達」と一緒に「ゲーム」や「ジェスチャー」などを用いて活動することが楽しさとなっていることが推察される。また、「つまらない」、「発表」という言葉は事前アンケートにのみに見られ、「伝わる」、「教える」、「動かす」という言葉は事後アンケートのみに見られる。CLILの授業前には、外国語の授業において「つまらない」と感じている児童が存在するとともに、児童にとって外国語の授業に対するイメージが「発表」という活動に強く置かれていることが推測できる。一方で、CLILの授業後には「伝わる」「教える」「動かす」といった言葉の出現からそれらの活動による成功体験や肯定的な印象が影響したことが考えられる。加えて、全体的に見ると事前アンケートに比べて事後アンケートでは表現された語数が多く、児童それぞれが外国語の授業の中で楽しさを感じる部分を明確に持つようになったことも示唆される。

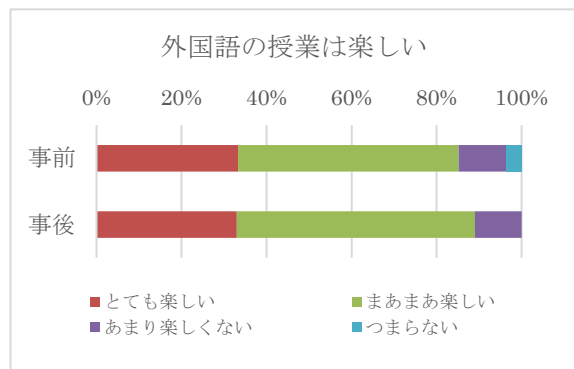


図3 「外国語の授業は楽しい」の回答

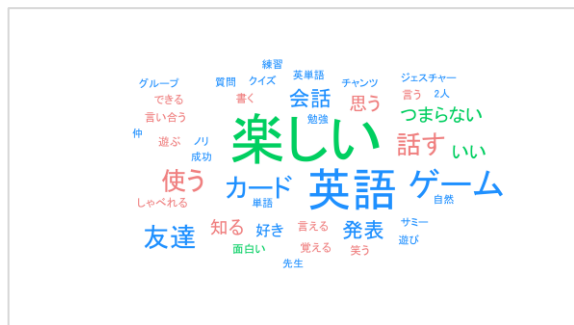


図4 外国語が楽しいつまらない理由(事前)



図5 外国語が楽しいつまらない理由(事後)

次に、自由記述「3時間の授業で、英語に関する新しい発見や気がついたことはありましたか」について、テキストマイニングを用いて分析した(図6)。出現頻度が高いものとして、「英語」、「わかる」、「知る」、「できる」などが挙げられる。児童にとって、本研究におけるCLILの授業は、「英語」の印象が強かったとともに、授業を通して「わかる」、「知る」、「できる」という経験ができた児童が多くいたことが推測される。「楽しい」という言葉の出現も頻繁に見られ、児童の学習意欲に肯定的な影響を与えた可能性が考えられる。一方で、「難しい」と感じた児童の存在も示されていることから、CLILの授業に対して難しいという印象を持った児童はいたものの、肯定的な印象を持つきっかけづくりや新たな学びを実感する経験ができた児童が多く存在し、それらが学習意欲に対しても良い影響を与えたことが示唆される。

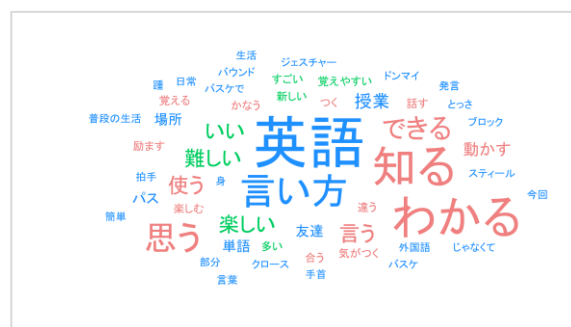


図6 3時間の授業に関する児童の回答

さらに、「授業をやってみた感想や楽しかったことなど、自由に書いてください」という自由記述において、テキストマイニングを用いて分析した(図7)。出現頻度が高いものとして、「楽しい」、「英語」、「体育」、「できる」などが挙げられる。「楽しい」という言葉が一番多く出

現していることから、児童の学習意欲に効果的であったことが示唆される。また、「組み合わせる」、「混ぜる」などといった言葉の出現も見られた。これらは、多く出現した「英語」、「体育」と同様に、本研究における CLIL の授業の特徴を示しており、児童にとって印象に残った点であることが明らかになった。

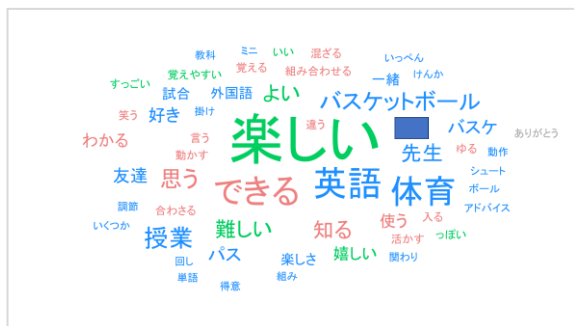


図 7 自由記述による児童の感想

これらのことから、学習意欲において「楽しい」という視点から多くの回答が見られ、肯定的な効果があったことがわかる。一方で、事前・事後アンケートによる有意差が見られなかったことから、CLIL の授業が与えるイメージが不明確であり、外国語という教科として認識されなかったことが原因として考えられる。CLIL の授業を定期的実施し、児童が教科授業として馴染みややすくすることが必要である。

## (2) 児童の語彙学習

児童の語彙学習については、語彙テストに注目し、理解語彙(表 2)、発話語彙(表 3)ともに事前と事後の結果を比較した。t 検定による前後比較では、どちらも有意傾向が見られた。発話語彙では全員が得点をキープする、または上がっており、理解語彙では全員の得点が上がった(図 8)。

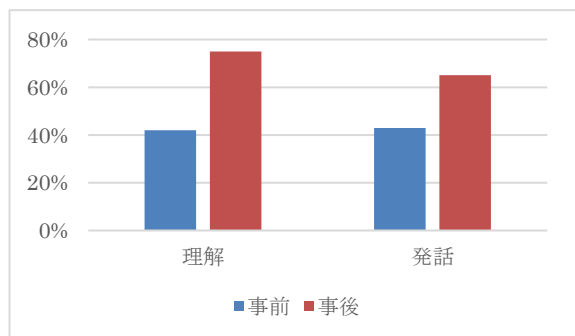


図 8 語彙テスト正答率

理解の語彙テスト(表 2)に着目してみると、“touch the ball”(ボールに触る)、“pass the ball”(ボールを渡す)、“catch the ball”(ボールをキャッチ)では、事前語彙テストでそれぞれ 79%、54%、83%という正答率であったのに対し、事後語彙テストでは 3 つとも正答率 100%となり全員が正答だった。その背景には、普段から日本語としても使用される語であると同時に、体育のバスケットボールの中でたくさん使用されたことが児童の全員正答につながり、語彙定着が見られたと推察される。また、“steal the ball(ボールを奪う)”は、事前語彙テストではほとんど正答できた児童はいなかったが、事後語彙テストでは 71%となり、70%を超える正答率となった。パスカットの意味を持つ“steal the ball”という言葉は、もともと知っている児童がバスケットボール経験者 1 人のみであり、知識として持っていないものだったことが推測される。この新出語彙については、授業の中で活動するときやパスとパスカットの説明を提示するときなど児童が耳にする場面を増やした。CLIL の授業 2、3 時間目でおこなった基本動作の英単語を確認する場面でも、聞く、発音する、動作をつけるという流れを繰り返しおこなったことが児童の記憶に残った可能性が考えられる。“stretch”(ストレッチ)、“space”(空いている場所)、“clap your hands”(手をたたく)においても、すべてにおいて大幅に正答率は上がった。一方で、“lay-up”(レイアップシュート)は事後語彙テストでわずかながら正答率は上がったものの、学級全体の 8%にとどまった。シュートは授業内でも 1 時間の中の一部でしか実施していなかったため、定着が見られなかったことが予想される。これらのことから、授業の中で積極的に使用場面をつくった語彙は、児童の記憶にも残ることがわかった。加えて、本研究における CLIL の授業で準備運動の一環としておこなった、基本動作の英単語を確認する(活動語彙を耳で聞き、声を出して発音しながら動作をする)は、体育をテーマとした授業の特徴が語彙学習に良い効果をもたらしたと推察される。

発話の語彙テスト(表3)に着目してみると、“立ち上がる”(stand up)、“座る”(sit down)、“跳ぶ”(jump)においては、事前語彙テストでは正答率がそれぞれ67%、79%、67%にとどまっていたものの、事後語彙テストではそれぞれ83%、96%、92%の児童が正答できた。また、“歩く”(walk)、“走る”(run)、“向きを変える”(turn)、“すごいね”(Good job)では、正答率50%以下から75%以上にまで正答率が上がり、その中でも“すごいね”(Good job)は、92%の正答率となった。これらの語彙は普段の授業でも頻繁に使用されるものであるが、教師が指示を出す場面での使用が多く、児童自らが発することは少ないと考える。

これらのことから、教師の指示で使用された語彙を受け身として理解するだけではなく、自ら発話できるレベルとして習得できていることが推測される。さらに、“惜しいね”(Close)は、正答率0%であったが事後語彙テストでは正答率50%となり、学級の半分の児童が習得できた。この語彙は体育との関連を図る際に児童同士の声かけとして必要なものに設定した。授業の中で実際に当事者として理解できる文脈での声かけを使用したことで、習得につながったことが示唆される。

### (3) CLILの要素を取り入れた授業の成果・課題

#### ① 小学校での実施について

小学校では、語彙レベルや4Cについての課題が挙げられていた。本研究では、使用する語彙レベルを既習事項と新出語彙とに区別し、特に新出語彙については、授業内の説明では日本語と英語を織り交ぜながら授業をおこなった。その結果、児童にとって難しいという印象はわずかに抑えられ、語彙習得に効果があったことは成果として挙げられる。4Cについては、初めて実施する際から完全なCLILをおこなえなくても、児童は興味を持って学習に取り組むことができていたことから、児童の実態に合わせた授業内容と活動を用意することで、小学校においても効果的なCLILの実施が可能であると考える。一方で、参考とする実践例は限られているため、わずかな参考資料を工夫しつつ、回

数を重ねるたびに授業例として蓄積する必要性が課題として挙げられる。

また、小学校では専門であるかに関わらず、外国語の授業を実施する可能性があるが、参考資料を用いて授業をおこなったことで、教師の負担は抑えられ、児童の実態に合わせた授業作成もおこないやすくなることが考えられる。さらに、実際の授業場面において、教師が英語を言い間違えた際には、児童が指摘するという場面があったことから、体育館という教室を出た場での学習にも集中して取り組んでいたことは成果として挙げられる。

一方で、英語という慣れない方法での指示をおこないながら体育の場づくりをしていくことや児童観察をおこなうことに大変さを感じた。特に、児童の活動の様子を見ながら声掛けをする際もできる限り英語を使用することを試みたが、思い返してみてもそこまで数多く使用することはできなかった。

これらのことから、小学校でCLILの授業を実施することに課題点はあるものの、専門かどうかに限らず、児童のレベルに合わせることで、可能な範囲で積極的に英語を使用することがCLILの授業を成立に近づけていけると考える。加えて、専門ではないからこそ児童の不安や難しさに共感できることがあると感じたことから、その点を生かし、授業を作成することが効果的だと推察する。

#### ② 体育をテーマとした実施について

本研究では、バスケットボールを題材として実施した。スポーツでは、英語と日本語で同じ言い方をする用語が存在するため、児童にとって理解しやすい場面づくりができたと考える。事後アンケートの自由記述「3時間の授業で、英語に関する新しい発見や気がついたことはありましたか」(図6)において、「言い方」、「言う」、「使う」といった言葉も複数見られ、体育の授業場面でも積極的に言葉を発する場面を設けたことが授業に影響して出現した言葉であると推測される。

また、児童の自由記述には、「文として理解できなくても、内容がわかった」、「身体を動かす

ほうが覚えやすい」などという記述も見られ、体育として実施することで、ジェスチャーや指示のイメージが持ちやすく、語彙学習にも良い効果を与えたことが考えられる。一方で、「身体を動かしながら英語の学習をすることは難しい」という児童の存在もあり、外国語の学習と動作という2つの認知活動が生まれることに対する混乱も課題だと考える。

## 6. まとめ

本研究では、「体育をテーマとした CLIL を授業に取り入れることの成果と課題」、「CLIL を取り入れることで児童の学習意欲と語彙学習にどのような影響を与えるのか」を目的とし、研究をおこなった。

「体育をテーマとした CLIL を授業に取り入れることの成果と課題」における成果としては、児童の実態に合わせた授業内容と活動で小学校でも効果的な CLIL の実施が可能であること、理解・イメージしやすい場面づくりができること、体を動かすことが語彙学習に効果があること、外国語専門に関わらず工夫を加えて CLIL が実施可能であることなどが挙げられた。一方で、参考資料や実践例が少なく限りがあること、外国語と体育の学習という認知活動を両立する難しさ、教師が指示を出す際の日本語と英語の使用バランスの検討といった課題も明らかになった。

また、「CLIL を取り入れることで児童の学習意欲と語彙学習にどのような影響を与えるのか」における学習意欲の観点からは、外国語がつまらないという児童の減少とともに楽しさを感じる児童の増加、自らの成功体験や新たな学びを実感できること、外国語に肯定的な印象を持つきっかけの場となること、などから児童の学習意欲に、ある程度の効果があったことが示唆される。さらに、語彙学習の観点から、授業内で語彙を繰り返し使用することや聞く・発音する・身体を動かすという流れの繰り返しによる学習が可能となり、児童が受け身でなく自らが当事者として発話できたことから、語彙学習にも効果があったと推察される。ただし、授業

内での語彙選定の難しさ、語彙の使用頻度などが語彙学習の習得に影響を与えるため、それらを踏まえた上で授業を作成する工夫が必要だと言える。

今後の課題として、本研究で扱わなかったその他の観点の意欲との関連性を調査すること、体育以外の教科をテーマとした CLIL の実践や児童に与える効果、さらに長期間を見据えた定期的な CLIL の実施による効果について、検証していくことが必要である。

## 引用・参考文献

- 濱本想子, 白石智也, 赤松一成, 敖敦其其格, 白石愛, 辻亮太, 大城穂乃香, 磯村美菜子, 岩田昌太郎 (2020). 「小学校における CLIL 体育の授業実践に関する事例研究—『跳び箱運動×感嘆詞』の内容的視点から—」『学校教育実践学研究』26, pp.47-58.
- 柏木賀津子, 伊藤由紀子 (2020). 『小・中学校で取り組むはじめての CLIL 授業づくり』大修館書店.
- 黒川愛子 (2020). 「TPR を用いたこどもたちへの外国語教育」『帝塚山大学子育て支援センター紀要』1, pp.29-38.
- 文部科学省 (2018). 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説外国語活動・外国語編』
- 沖原勝昭 (2016). 「英語教育改革における CLIL の役割」『京都ノートルダム女子大学研究紀要』46, pp.1-13.
- 櫻井千佳子 (2017). 「『フェイス』の概念の小学校英語教育への援用:英語学習意欲の促進要因の分析」『武蔵野教育學論集』2, pp.77-90.
- 宇土泰寛 (2018). 「CLIL の視点を活かした小学校外国語教育と社会科の学習知の融合—社会科での地球的課題の学習知を活かした英語教材の開発—」『椋山女学園大学教育学部紀要』11, pp.135-146.
- 山野有紀 (2013). 「小学校外国語活動における内容言語統合型学習 (CLIL) の実践と可能性」『Eiken bulletin=「英検」研究助成報告/日本英語検定協会編』25, pp.94-126.